

2013 年度
「卓越した大学院拠点形成支援」プロジェクト
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
国内学会・研究会発表助成 報告書

ザンジバルの農村における建築資材の変容—タンザニア・ペンバ島の事例—
角田さら麻

タンザニアのインド洋沖に浮かぶザンジバル諸島は、ウングジャ島とペンバ島を中心とする多数の島々からなる。ザンジバルは、世界遺産に登録（2000年）されて多くの観光客を集めるとともに、世界有数のチョウジ（クローブ）の産地としても知られている。古くからアラブとの交易が盛んで、人びとの暮らしや街並にはアラブ世界の雰囲気漂い、それは建築様式によく表われている。田園のひろがるペンバ島にも、ザンジバル特有の農村風景が見られる。本会では、ペンバ島における建築様式の調査から明らかになった、近年における建築の技術と材料の変化について報告する。

ペンバ島では、民家が村ごとに密集して建ち並び、各家の周囲にはヤシや熱帯果樹が屋敷林を形成している。家屋は土壁の木造平屋建てで、屋根はココヤシの葉、あるいはトタン板を葺いた寄せ棟造りである。玄関扉には木彫りの装飾が施され、重厚な両開き扉の脇にはバラザと呼ばれる腰掛けが常設されている。おもな建築材料は、木材・ココヤシの葉・アブラヤシの葉柄・土・石・石灰で、その多くは島内で手に入れることができる。家屋は、ある様式に従いながら長い歳月をかけて完成され、世代をこえて受け継がれることもある。そのため、人びとは建築資材の選抜には慎重で、とくに木材に関しては、シロアリ耐性の有無・重量・歪みなどによって部位と用途ごとに細かく使い分けている。

家屋の骨格には、おもにマングローブとチョウジの材を使う。ペンバ島の海岸線を縁取る天然林は7種類のマングローブ樹で構成されており、人びとはそのうち耐シロアリ成分のタンニンを多く含む3種のみを建材として利用してきた。この3種の樹種は優良な建材として島内で使うだけでなく、かつてはアラブへの重要な輸出品でもあったが、近年では環境保全のために伐採が厳しく規制されて入手が難しくなっている。林の管理は政府の森林局からコミュニティに委託されており、無秩序な伐採を規制しつつ、すぐれた建材として択伐しながら利用している。また、マングローブを植林している地域もあり、この貴重な天然資源の維持と共有に努めている。チョウジの材もシロアリ耐性があり、実を着けなくなった老木を切り倒して、マングローブ材の代わりに使うようになってきた。

島内には8世紀に築かれた住居跡をはじめ、11～15世紀のモスク・墓・住居跡、17～18世紀の要塞などの遺跡が数多く残っている。遺跡はいずれも珊瑚石を積み上げた石造物で、その接合には珊瑚石からつくった消石灰を用いていた。消石灰は珊瑚石を燃焼させ、水をかけて消化させることで生成される。かつて海岸から豊富にえられた珊瑚石が、ザンジバルの「ストーンタウン」に代表される高層建造物や数々の遺跡を作りあげたのである。消石灰は砂・水と混ぜ合わせたセメントに酷似したモルタルや、水と練った漆喰として壁の表面に塗られ、壁の強度を保つとともに、アラブ風建築によく見られる白い壁面をうみだしていた。ところが、無尽蔵に見えた珊瑚石も長い歴史のなかで取り尽くされ、最近では採集が禁止されている。民家の壁の構造体には珊瑚石の代わりに粘土が使われ、表面にだけ消石灰が塗られるようになっている。そしてこの消石灰も、珊瑚石からではなく、貝殻

を原料としている。マングローブ林や浜辺で採れる大量の貝類は重要な副食として頻繁に食されるが、彼らはその貝殻を焼き、貝灰から消石灰をつくるようになってきたのである。

かつては輸出品でもあったマングローブと珊瑚石が人びとの住居を支えていた。そして現代、マングローブが育む貝と、地域経済の母体でもあるチョウジが家屋の基礎をつくっている。建築材料をとおして、資源利用のあり方や経済の変遷を追うことができる。